法華経御籤に関する一考察

―新出史料『法華宗御鬮繪鈔』を手がかりに―

芹澤寛隆

目次

一、問題の所在
二、法華経御籤とは
三、『法華宗御鬮繪鈔』について
四、考察
五、まとめ

一、問題の所在

筆者は以前、山梨県常在寺蔵『法華経御鬮霊感籤』の翻刻・現代語訳・解説を出版した。[1] その後、法華経御鬮について様々な史料を収集したがいずれも御籤部分のみの書物であり、『法華経御鬮霊感籤』に見られるような、教学的内容も示したものはなく、こうした書物が出版された理由や対象者について示すような文献は発見できて

いない。また、『法華経御圖霊感籤』の成立に当宗の浅草長國寺が関わっていた可能性があるという仮説についてもその裏付けとなる史料は発見できていなかった。

しかし、今回『法華宗御圖繪鈔』という文献の入手に成功し、その内容を精査した結果、以前の『法華経御圖霊感籤』解説において提示した仮説、すなわち長國寺を中心とする当宗寺院、特に「江戸十三ヵ寺」の手によって、『法華経御圖霊感籤』が成立したとする説を裏付けることができたため、『法華宗御圖繪鈔』の内容を示しつつ、江戸末期における庶民信仰や信者獲得のツールとして作り出され、用いられたと考えられる法華経御籤について少しく考察を行うものとする。

二、法華経御籤とは

すでに『法華経御圖霊感籤』において解説を加えたものであるが、再度、法華経御籤とは何かについて述べたい。

そもそも日蓮大聖人（一二二二―一二八二）（以下、大聖人と称する）は御籤についてどのようにお考えであったのだろうか。その御遺文を確認する限り「御籤」に関する記述はない。大聖人御在世の頃既に元三大師御籤は成立していたとされているが、御籤に言及するということは無かったのである。

しかし、大聖人御入滅後、日蓮門下においては御籤によって仏意を得ようとする考えが入ってくるようになった。それは本山の住職決定の際に見て取れる。

京都四条門流の大本山である妙顕寺では、住職が後任を定めず遷化した時に御籤によって後継を決めたという

記録がある。『龍華秘書』に

夫吾今円頓之宗旨者従元師蓮公大士五代之祖源師、歳五十三、永和四戊午正月十八辰刻、頓示非滅現滅之粧給故、御遺跡相続之事不分明、然間大衆為検義連署云、各々閣嵒負之儀、宣任仏前御鬮被貫首云云、然則三度之御鬮予以得之、頑愚之伝受雖憚多冥慮非可黙止、入文室開函底得

とある。これは妙顕寺第六世日霽聖人（一三四九―一四〇五）に関する記述である。第五世の老源和尚（一三二六―一三七八）が永和四年に遷化した後、後継の貫首を仏前におけるくじ引きで決めることとなり、日霽（通源）・日実（京都妙覚寺開創）・日成（妙覚寺）の三人が候補となったが、三度とも日霽の名が出たことから、日霽が貫首となり、日実・日成は退出して妙覚寺を創建することとなり、像門初の分流となった出来事である。おみくじで将軍となったことで有名な足利義教（一三九四―一四四一）の就任は応永三五年（一四二八）であり、それよりも早く妙顕寺ではおみくじで後継を定めるという行為が行われていたのである。

以上のような住職決定の手順は、日隆聖人にも継承されている。日隆聖人の御遺言状に本興寺能化の決定次第が以下のように示されている。

日隆聖人未来遺言之〇（古に又）

右、被仰下之條

日隆聖人御入滅已後、於本興寺能化、七年之間可相待器用之人、但、其中修学者有之、僧衆・檀方以相談合可定住持者也、若器用之人多者、如京都、於本尊御前、可取御鬮、仍為後代、被仰下之処、如件

宝徳三年二月一日　　日隆（花押）

本興寺能化としてふさわしい人物が複数いたときは京都の本尊の御前にて御鬮を以て決定せよとある。

写真①　『法華経御闡霊感籤』全三冊　常在寺蔵

このように、いわゆる、一致派、勝劣派を問わず、京都においては「闡」によって仏意を求めるという考えが定着し、容認されていたのである。その容認が、近世に入り、庶民への信仰拡大という要請の中で元三大師御籤とは異なる形での御籤の存在が求められてきたと考えられる。その中で作られたのが『法華経御闡霊感籤』（写真①）である。

『法華経御闡霊感籤』は全三冊からなる。

以前芹澤が翻刻した常在寺所蔵本は平楽寺書店編輯部編昭和改版（開宗七百年記念改版）であり、底本は文久元年（一八六一）に刊行されたものである。『法華經御闡霊感籤』については、天保三年（一八三二）刊行のものが最も初期のものと考えられる。また、『法華経御闡感應籤』という同一内容の書物も確認できる。こうしたことから、一九世紀前半には既に『法華経御闡霊感籤』は成立していたと思われる。

以下にその一例を示す（写真②）。

このように、番号、吉凶　総運、経文　経文や内容に関係する図絵、御籤の意、項目毎の説示が示されている。こ

写真②　「法華経御圖霊感籤」下巻一丁表

写真③　「元三大師御籤諸鈔」上

のうち経文は、いわゆる法門開示に関する箇所は無い。そのかわりに法華七喩といわれる箇所からの引用が多い。また、引用箇所については、法華経二十八品から満遍なく引用されている。

次に『法華経御圖霊感籤』が参考にしたと考えられる『元三大師御籤』（写真③）を挙げる。

こちらも番号、吉凶、漢詩、漢詩解説、アドバイスが示されており、両者は非常に良く似ている。それぞれについてその特徴を示すと、次の表のようになる。

表①　『法華経御圖』と『元三大師御籤』に比較

『法華経御圖霊感籤』		『天竺霊感元三御籤』
一～九六	番号	一～一〇〇
『法華経』の経文	漢文	漢詩
大上吉～大悪の六種	吉凶	諸本によって様々
不明	作者	元三大師とされる

こうした共通点、相違点から『法華經御闔霊感籤』の御籤に関する箇所は『元三大師御籤』の形式を参考にしていると考えられる。

では、『元三大師御籤』から『法華經御闔霊感籤』に至るまでのプロセスはどのようなものであったのか。また『法華經御闔霊感籤』が新たに作られた理由とは何なのであろうか。それを知る手がかりとなるのが『法華宗御闔繪鈔』である。

三、『法華宗御闔繪鈔』について

同書は文化十四年十二月（一八一八年一月）に二都書林から発行されたものであり、京都・大阪・江戸の書肆が名を連ねている。全一巻から成り、序文は谷中宗林寺第二〇世龍進院日行、跋文は浅草田甫幸龍寺第十八世祥趣院日選による。両寺とも本国寺末頭録所三ケ寺の一つであり、江戸を代表する日蓮宗寺院である。

内容としては目次がないものの分類を行えば以下の通りである

- 表紙
- 序文
- 法華宗勧請總佛神略圖
- 法華宗三十番神之真像
- 宗祖大菩薩御難所遠景之圖
- 十界勧請之圖

・御闔頂戴の作法および御闔筒・御闔竹の法
・宗祖大菩薩火防の御歌
・百闔
・日本奇瑞感應霊場
・江戸近邉十祖師廻
・江戸市中十祖師廻
・江戸利益感應諸佛神廻
・鬼子母神
・七面大明神
・當宗三社託宣
・甲州にて疱瘡平癒の御歌
・六老僧・九老僧・中老僧
・法華経壱部の功徳に向ふ御経題目
・法華宗回向文（幸龍寺十八世日選）
・四菩薩四大列
・十界勧請本尊和解
・大集會（身延山久遠寺・本所法性寺・池上本門寺・堀之内妙法寺・浅草本法寺・浅草幸龍寺・正中山法華経寺・片瀬龍口寺・柴又帝釈寺）

・京都十六ヶ寺本山廻
・大阪妙見尊十六ヶ寺廻
・法華宗勧請妙見尊依神〇失物出入納方角を知る
・法華宗御闔繪抄跋

このうち、特に注目したいのが

・序文
・百闔
・江戸利益感應諸佛神廻
・六老僧・九老僧・中老僧
・法華宗御闔繪抄跋

である。それぞれについて以下に見ていく

三―一：序文

この序文は先に挙げたように谷中宗林寺第二〇世龍進院日行の手による。その中に、

此頃村上日定士廣く衆人の願望成就なさしめんとを思て百籤の抄を本山より得て信力の手に窺ひ得させす●●（以下、●は判読不能）諸願成就せしめんことを乞四方の信者壱度うかがひ神慮にた●●心願たち処に成就すべきと云爾

とある。ここでいう村上日定士とは誰を指すか不明であるが、書肆として有名な村上勘兵衛ではないかと推測される。その村上日定士が本山より「百籤」を得たとあるが、百籤とは天台の手による「元三大師御籤」を指すと

考えられる。その籤を四方の信者のために刊行したということが示されている。これまで『法華経御圖霊感籤』の序文や跋文を見てもその出所が不明であったのに対して、本書では成立理由、御籤の対象が明らかにされているという特徴がある。

三―二：百圖

まず、一例を挙げる。（写真④）

写真④　『法華宗御圖繪鈔』(4)

この御籤の大きな特徴としては、『法華経御閻霊感籤』のような経文ではなく、「元三大師御籤」に見られる漢詩が示されているという点である。挿絵についてもそれまでの「元三大師御籤」で用いられていたものと非常によく似ている。しかし、籤の内容を説明する文について見てみると、「元三大師御籤」とは内容が異なる。以下にそれぞれの説明文を翻刻する。なお、読みやすくするため、各項目の前に付いている記号（○・△）ごとに適宜改行を行った。

第二　小吉

（本文）○此みくじの人は天照大神八まん大ぼさつをいのりてよし

○ぐわんもう叶べしさりながら中にさはりありてじやうじゆせぬ事おしてねがふべし

○方角西南の方萬よし

○ぞうさく●のつくり●わけよし

○祝事何にてもと丶のふ末丶までもよろし

○病人大事也されども本ぶくはすべしむしんじんきねんによるべし

○たび立おもふやうになけれども行さきよし

○まち人おそく来るべし

○失物ふ出

○賣買利ぶんうすし
○女にはよし
○てんきのどかなり

次に元三大師御籤の同じ番号のものを示す。（写真⑤）

写真⑤　「元三大師御籤」（『御圖判断抄』）(5)

△此みくじにあふ人はなにごともはじめはこころにまかせざるなりかみほとけをいのりじせつをまてばのちよろこびにあふべし
△病人ながびけどもほんぶくす
△よろこびことのちよりよし
△まち人おそけれどもきたるべし
△そしやうごとかなひがたし
△うせもの出がたし
△あらそひことのちよし
△あきなひごとはうりかひともによし
△やづくりわたまし日かげのところならばよし
△よめとりむことりたび立よし
△生死はいきるなり

ここで示された説明文の内容は『法華経御闔霊感籤』とは大きく異なる。次に『法華経御闔霊感籤』の同じ番号の内容を挙げる（写真⑥）。

第二番　大吉

知其初懐妊
成就不成就
安樂産福子
以聞香力故

此みくじの心はばんぶつのはじめて娘わがにして人を生す。人もままこ等如くにしてすでにくわいにんして信心つよければ安くしてよき子をうむ又はらにある子女なりともてんじさせ玉へと願ふときはたちまち男子生れ男子生れて後立身すべし。法花経の御力信心によりて心のまゝ也

願望　じやうじゆすべし
婚姻　いわひ事よし
出産　大によしよき子をうむ
疾病　大事也しんじんすれば本ぶくす
待人　おそくきたる
旅行　はじめは思ふ様になくとも行さき良なれば末程よし
春公　よろし、女はべつしてよし
遺作　ざうさくわたまし万よし
訴訟　口舌争上たる人より指図をうけて大に勝利をうる
売買　値は下る也、売に利あり、買に利あらず
運気　むめの花のさきかけてはるをまつがごとし
天気　雨ふる、風いづればはるる

写真⑥　『法華経御圖霊感籤』

「元三大師御籤」には諸本あり、それぞれに項目や文言に差があるため、一概には言えないが、今回用いたものは明治二十四年発行のものであり、版本としては最も近代のものである。一つ一つの項目等を確認すると、病気など似ている表現もあるが、項目も吉凶も異なることが確認できる。また『法華宗御圖繪鈔』の説明文を確認するとそれぞれの番号ごとに特定の神仏への祈りを捧げることを勧める内容の文章がある。他の番号を確認すると三十番神のひとつである貴布祢大明神や加茂大明神といった名を確認することが出来る。このことから、法華勧請の神仏への信仰を「元三大師御籤」に対するオリジナリティとして示していると考えられる。

三―三：江戸利益感應諸佛神廻

江戸において、日蓮門下寺院の中から特に御利益があるとされる神仏像について紹介がなされている。その中に当宗の長國寺蔵鷲大明神がある。このことから、単に日蓮宗のみならず、広く日蓮門下全体のための書物として成立していることがわかる。また祖師像についても京都・大阪と比較して紹介されている数が多いことからも江戸庶民をターゲットとして刊行されていたと考えられる。

三―四：六老僧・九老僧・中老僧

中老僧の順列および肩書きについて、『法華宗御圖繪鈔』については他の文献と異なることが確認できた。『本化別頭仏祖統紀』[6]『法華宗御圖繪鈔』『法華経御圖霊感籤』によれば中老は十八名おり、その順序と僧名、肩書きは以下の通りである。

表②

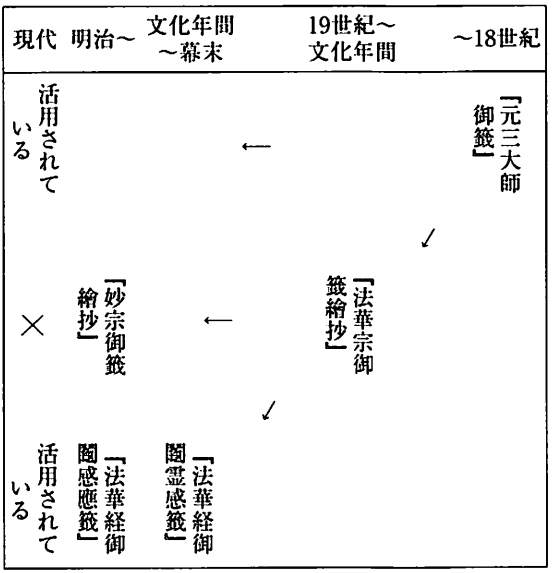
	『本化別頭仏祖統紀』	『法華宗御闔繪鈔』	『法華経御闔霊感籤』
(1)	甲州安国山立正寺開山日法	房州小湊山誕生寺日家	日法聖人　和泉阿闍梨立正山安国寺祖
(2)	房州小湊山誕生寺初祖日家	駿州岩本山実相寺日源	日家聖人　寂日坊小湊誕生寺祖
(3)	駿州岩本山実相寺開山日源	上総鷲巣鷲山寺日辯	日源聖人　播磨法印岩本実相寺祖
(4)	佐渡阿仏房妙宣寺二世日満	駿州岡宮光長寺日法	日得聖人　豊後阿闍梨阿佛坊妙宣寺祖
(5)	南総墨田妙福寺開山日秀	甲州小室山妙法寺日傳	日秀聖人　丹後阿闍梨墨田妙福寺祖
(6)	相州相橋長福寺開山日忍	駿州村松海上寺日位	日忍聖人　下野阿闍梨相橋長福寺祖
(7)	駿州柚野竹養山正法寺開山日進	下総正中山法華経寺日常	日進聖人　三位阿闍梨袖ノ正法寺祖
(8)	駿州村松海上寺二世日賢	武州品川妙國寺天目	日賢聖人　淡路阿闍梨村松海上寺祖
(9)	南総興津妙覚寺開山日保	佐州妙宣寺日得	日保聖人　帥の法眼奥津妙覚寺祖
(10)	北総正峯山妙興寺開山日辯	下総野呂妙覺寺日合	日辨聖人　越後阿闍梨中村妙興寺祖
(11)	常州本国山妙光寺開山日門	武州雑司ヶ谷法明寺二世日賢	日門聖人　一乗阿闍梨常州妙光寺祖
(12)	北総正中山法華経寺三世日高	正中山二世日高	日高聖人　帥ノ阿闍梨正中山二世
(13)	駿州沼津妙海寺開山日実	上総興津妙覚寺日保	日實聖人　但馬阿闍梨沼津妙海寺祖
(14)	甲州小室山妙法寺開山日傅	駿州沼津妙海寺日実	日傳聖人　肥前阿闍梨小室妙法寺祖
(15)	大輔公日祐	下総曾谷法連寺日禮	日祐聖人　大輔公
(16)	駿州池田青竜山本覚寺開山日位	豆州玉澤二世日祐	日位聖人　治部卿池田本覚寺祖
(17)	北総野呂妙興寺開山日合	相州相橋長福寺日忍	日合聖人　肥前阿闍梨野呂妙興寺祖
(18)	野州佐野妙顕寺開山天目	常州築地妙光寺日門	天目聖人　美濃阿闍梨佐野妙顕寺祖

『本化別頭仏祖統紀』と『法華経御圖霊感籤』では、阿闍梨号の有無を除けば全く同じ内容といって良い。しかし『法華宗御圖繪鈔』では順列も人物も大きく異なる。特に日辨聖人、日法聖人の肩書きが当宗寺院開山になっている点は特筆すべき点であろう。

写真⑦ 「江戸切絵図」（部分）

三―五：法華宗御圖繪抄跋

この跋文は先に挙げたように幸龍寺十八世日選の手による。肩書きには「浅草田甫主人」とあり、当時の古地図（写真⑦）を確認すると長國寺のほど近くにあることがわかる。[7] 本文中にも大集会を行っている寺院として採り上げられている。



図① 法華御圖の変遷

四、考察

以上のように、『法華宗御圖繪鈔』について紹介を行った。その上で、次に『妙宗御圖繪抄』[8]という書物を紹介する。本書は明治二十二年出版、石井宣應校訂、（須原屋）北畠茂兵衛発行、三村日修（日蓮宗管長）題辞からなる書物であり、内容としては『法華宗御圖繪抄』と御籤については全く同じである。

以上、『法華宗御圖繪鈔』『法華経御圖霊感籤』『妙宗御圖繪抄』の関係について図示すると以下のようになると考えられる。

そもそも存在していた『元三大師御籤』の存在があり、それを用いた布教活動、またその中興とされる、

天海および寛永寺の影響を強く受けた現状に対して、江戸の日蓮門下、特に日蓮宗幸龍寺、当宗の長國寺が中心となって、様式は『元三大師御籤』を踏襲した『法華宗御籤繪鈔』を作成、刊行した。その際に当宗側からは江戸組寺を中心として編纂に協力がなされた故に中老である日法聖人、日辨聖人を当宗寺院の祖として記すという結果を得たのではないだろうか。

その後、さらに日蓮門下オリジナルを作成するにあたり、幸龍寺や序文を書いた谷中宗林寺などの江戸の日蓮宗寺院が『法華経御闔霊感籤』作成に関与した可能性は「江戸利益感應諸佛神廻」や江戸由緒寺院の大集会についての記事が『法華経御闔霊感籤』に見当たらないことから、低いと考えられる。その代わりに、より現実的に活用出来ること、初心の僧侶のための内容を追加する形で、日蓮門下全体に関わる出版を手がけていた平楽寺の協力のもとに『法華経御闔霊感籤』が作られたと考えられる。その際に『元三大師御籤』のような漢詩ではなく、『法華経』に基づくオリジナルの御籤が長國寺をはじめとする法華宗寺院および、平楽寺と深い関係のある関西の妙見信仰、清正信仰に関わる寺院によって編み出されたと考えられる。

明治に入り、幸龍寺などのグループは日蓮宗管長の題辞を付け、権威付けを行うが、紙片での御籤に対応すること、宗派を問わず、より幅広いターゲットを想定していたこと、活字化することにより、読みやすさという点でも工夫がなされたことなどから『法華経御闔霊感籤』『法華経御闔感應籤』が広まるようになり、『法華宗御籤繪鈔』が廃れたものと考えられる。

さらに近現代になると、御籤という非科学的なものへの嫌悪や『元三大師御籤』と比較した際の規模の差から商業化の波に乗れず、一部の寺院でのみ用いられるようになったと考えられる。

五、まとめ

以上、少しく法華経御籤について考察を行った。『元三大師御籤』と『法華経御鬮霊感籤』をつなぐミッシングリングとして『法華宗御籤繪鈔』という書物があり、その段階で当宗が関わっていた可能性があるという仮説をより強めることが出来たと思われる。今後はさらに考察を進め、諸本の差異や内容を通して法華経御籤の思想史的展開を確認したい。

注

(1) 拙著『常在寺蔵法華経御鬮霊感籤』霊鷲山常在寺　二〇一六年

(2) 『法華経御鬮霊感籤』平楽寺書店編輯部編昭和改版（開宗七百年記念改版）

(3) 芹澤蔵『元三大師御籤』（部分）

(4) 芹澤蔵『法華宗御籤繪鈔』（部分）

(5) 国立国会図書館デジタルコレクション『御鬮判断抄』http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/760882

(6) 「本化別頭仏祖統紀」『日蓮宗全書』日蓮宗全書刊行會編　一九一〇―一九一一

(7) 国立国会図書館デジタルコレクション「〔江戸切絵図〕今戸箕輪浅草絵図」（部分）http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12286208

(8) 国立国会図書館デジタルコレクション『妙宗御鬮繪抄』http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/760886